



論文にまつわる雑感

ある学術誌に投稿した論文が最近ようやくアクセプトされた。初回投稿から、実に2年の歳月を要した(1.5年というこれまでの記録を半年も更新)。この論文の実験は当時博士課程だった学生がほぼすべて行い、第1著者として論文の執筆も行った。レフリーからの膨大な追加実験をこなし、再投稿後に卒業。その後、2回の改訂を経て何とかという感じだ。基礎研究に一生懸命励んだ第1著者の学生とアクセプトの喜びを共に研究室で分かち合いたかったが、それも叶わなかった。このケースに限らず、初回投稿からアクセプトまで1年くらいは当たり前のようにかかることが多くなった。その間の学生のモチベーションを維持させるのは容易ではない。卒業まで完結できないかと思っただけのおさらのことだ。

(私のこれまでの経験からだ)不完全な状態で論文を投稿しているわけではないが、査読後に要求される追加実験の量が非常に多い。中には、論文の結論に影響のないものや、その実験に要する時間を本当に考えているのかと疑いたくなるコメントも含まれる。しかし、(小心者の)私の場合、ほぼすべての追加実験を行うわけで、その結果、時間はかかり、掲載するデータ量も多くなる。一つのFigureの中に多くのパネルが並ぶこともざらである。特にメジャー誌では珍しくもないが、老眼が進んでいる私にとっては、小さい図を見るのが本当に疲れる。Supplementary Figure数にいたっては20を超えるような論文も散見される。データを誌面以外に掲載できる無尽蔵なデジタル空間、本当に困ったものだ。

私は英語が得意ではないので、論文投稿の前に英文校

正をしてもらう。ある校正の際に、その論文の投稿先候補をAIが選んでくれたのには驚いた。あいにく投稿予定の雑誌ではなかったものの、どのようなアルゴリズムで選んだのかを聞いてみたい。近年、AIを用いた解析法が生物・医学研究にかなり浸透してきた。人間の目や頭だけではもはやその傾向すら捉えることができない膨大なデータから、AIは予想外の相関性を見出すことができ、多くの分野の発展に大きく貢献している。ただ、細胞や動物の立ち振る舞いや反応をリアルタイムに観察し、時折見せる意外な挙動から、生物って不思議だ！研究って面白い！と感じて育ってきた私のような者にとっては、何か今ひとつ物足りなさを感じてしまう。自分の目でその変化や違いを見ないと気が済まない性分なので仕方がない。近年、私も論文の査読を有難く頂戴する機会が増え、(いかにも怪しい)ウエスタンデータの論文内での不適切な転用や改ざんを自分の目で発見する能力はお陰様で格段に上がった。しかし、論文間のデータ盗用などはさすがに発見するのは容易ではない。昨今、オープンジャーナルが乱立し、中には、査読が曖昧で、かなり質の悪い(というか実在しない)データを載せるようなものもあり問題となっている(いわゆるハゲタカジャーナル)。論文査読での剽窃チェックに加えて、データそのものを監視するAIに是非登場してもらいたいものだ(すでにあるのかもしれない)。

PubMedなどがまだ普及しなかった頃は、文献一つ探すのに図書館の書庫に行って、学術誌ごとに製本されたものから探して読んでいた。今では到底考えられない手間と労力ではあったが、図書館で学術誌をペラペラめくりながら読むのは私はわりと好きだった。そういえば、最近、図書館に行っていないなあ。明日、息抜きを兼ねて久しぶりにアナログ世界に行ってみるか。

今回は論文に関する雑感として思いのままに書かせていただいた。大変稚拙な内容になってしまったことをお許しいただきたい。

(つきみ)